2020 年 10 月 4 日　説教「賜物が生かされて」

ローマ人への手紙 12 章 1～8 節

今朝は転入会式があります。そのことを覚えつつ新約聖書を開きます。

１．実際的教えの基礎（1～2 節）

①聖い供え物として（1）**「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。」**。救済論が論ぜられるローマ書は 12 章から実際的勧めに入ります。1~2 節は 12 章全体の要の教えです。ここでなされる勧めが、主の大いなる憐みによるとまず確認されます。その上で、「あなたがたのからだを、ささげなさい。」とあります。「からだ」というのは「身体」ではなく、その人の存在全体を意味します。「聖い、生きた供え物として」とありますが、私たちは聖さからは遠く、生き生きとしていません。しかし、ただキリストの十字架と復活の福音信仰の原点に立ち、自分を捨て、神にゆだねていくなら、神に受け入れていただけるのです。カインとアベルのことを想起しましょう。

②霊的礼拝（1）**「それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」**私たち教会の礼拝はプログラムがあって、それぞれに恵みが詰まっていることを先週の「教会の交わり」で確認しました。でも、その前提として、神の前に自らを差し出していくことが、礼拝の根本なのです。

③この世に合わせない（2）**「この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か。すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるかをわきまえ知るために、心の一心によって自分を変えなさい。」**この箇所は 9 月 24 日の祈祷会でも取り扱いましたが、「心の一心によって自分を変えなさい」というのは、自力によるかのような誤解しやすい訳で、2017 年度版の、「自分を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。」という訳の方がよさそうです。そして、創造主を無視した考え方、生き方に巻き込まれてしまうのではなく、神の御心をいつも求める信仰が大切なのです。生きていくにあたって、何が良いことで、神に喜ばれ、何が完全に向かっているのかをわきまえていきなさい、というのです。

２．からだと器官に例えられた教会（3～5 節）

①慎み深い考え(3)**「私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。」**1~2 節の精神を覚えつつ、3 節以降は具体的な勧めがなされます。3～8 節は、教会の中にあってのそれぞれの働きについて教えられます。パウロは自らに与えられてきた恵みというものをかみしめながら伝えます。パウロ自身、多くの賜物を授けられていましたが、自分の賜物で

はないこともよく悟っていました。ですから、教会にあっては一人一人が慎み深く、謙遜になって自らの役割というものをわきまえていくことが大切なのです。ふさわしい場所にある時にその人も生きるのです。

②多くの器官（4）**「一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きをしないのと同じように、」**第一コリント 12 章にも 4 節以下と重なる内容が記されています。即ち、一つのからだには多くの器官があります。Ｉコリントでは「からだの部分」とあります。器官はからだの部分と同じような意味で使われています。それぞれの器官が、別の役割を見事に担っていることを例としているのです。

③互いに器官（5）**「大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。」**教会の中に、多くの人々がいるとしても、一人一人がそれぞれの器官としての役割を果たし、なおかつ全体で一つのからだであるのが、キリストの教会なのです。

３．教会における賜物（6～8 節）

①異なった賜物（6）**「私たちは、与えられた恵みに従って、異なった賜物を持っているので、もしそれが預言であれば、その信仰に応じて預言しなさい。」**パウロは自らに与えられた恵みは、教会の一人一人にも与えられていることを述べた後に、それぞれが、体のように異なった役割があることを伝えます。そして、まず例として出されるのが、預言をする人です。預けられた御言葉を語り告げる役割です。その人は信仰によってそのことを大胆に伝えるのです。

②奉仕の人、教える人（7）**「奉仕であれば奉仕し、教える人であれば教えなさい。」**ベタニヤ村のマルタはイエス様が来られたので、一所懸命に働きました。もてなしを懸命にするマルタには、キリストの話に聞き入るマリヤの姿が、少しうとましくありました。そこでイエスに訴えるのでした。しかし、マルタは多くのことに気を使い、マリヤはその良い方を選んだと、主は明言されるのです。奉仕は人を見るのではなく、主を見て行うのです（コロサイ 3:23）。奉仕にはいろいろあり、その人に与えられた奉仕をするのです。さらに教える賜物を持つ人は、その賜物を生かします。

③勧める人（8）**「勧めをする人であれば勧め、分け与える人は惜しまず分け与え、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は喜んでそれをしなさい。」**勧める賜物とは、福音の勧め、教会への勧めなどがあるでしょう。勧める奉仕にもいろいろな要素があります。分け与えるというのも、様々な分野があり、思ってもみなかったものを分け与えることがあるのだと気づくことがあります。高齢者の知恵も他の人にはないものでしょう。逆にこの教会では若さが分け与える賜物かもしれません。指導するには指導力や人々から応援される要素も必要です。ボランティア活動が一般化していますが、その精神であのベースが聖書のなかに「慈善を行う」と示されてあったのです。

《結論》　「教会はキリストのからだ」（エペソ 1:23）ですが、そのからだには様々な器官があるのです。それぞれの器官が正しく働いてこそ、そのからだは健康を保つことができます。また、健康な体があればこそ、教会は整えられた働きをなすことができるのです。

キリストのからだにおける器官とは、教会に連なる一人一人のクリスチャンです。そして「キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされて、成長して、愛のうちに建てられるのです」（エペソ 4:16）とあるように、それぞれの器官がその働きをなし、麗しく結合されていくときに、キリストのからだは生きて用いられるのです。

さて、そこでこの賜物について考えます。賜物というのは正確にいえば才能とは違います。重なっている部分が多いので、同じ意味に使われがちです。神によって与えられ、聖霊に働きによって用いられるのが賜物です。ですから、たとえば音楽の賜物というのは、ただ技術が優れているということではありません。聖霊によって用いられる時に、その才能は賜物とも呼ぶことができるのです。一方、眠っている賜物というものもあります。せっかく神によって与えられているのに、隠れている場合、本人も気づかない場合もあります。その人が神によって光を与えられていくときに、その賜物は眠りから覚めて生かされるようになります。自分ではマイナスの面だと思っていることが、大きな賜物である場合もあります。また、賜物があり、その人が用いたいと思っていても、罪が邪魔をしてそれが生かせない場合もあります。聖霊によって取り扱われ、その人が変えられていかなければならないのです。

だからこそ、1～2 節にある原則が大切なのです。賜物を携えるクリスチャンが献身的な信仰を教えられ、この世の考え方に流されずに、主イエスを絶えず見上げながら、霊的成長をしていくことが重要なのです。そして、器官が機能し始め、器官と器官が聖霊の働きによって結び合わされていくと、教会は霊的な働きをすることができるのです。

今日、日本の教会は老齢化していると言われます。しかし、89 歳の牧師が青年のごとく働いていると伝え聞きます。また、一方では若い献身者が与えられるように祈りましょう。翻って、私たちの教会は、その働きが有機的に働いているでしょうか。もっともっと賜物が生かされていくならば、そのからだなる教会は生きて働くことができるのではないでしょうか。その賜物のゆえに、人間がほめられることには注意しなければなりません。恵まれる教会とは、賜物が生きて働かされ、どこまでいってもキリストの名がほめられるのです。今、ご自分

の胸に手をおいて考えてください。自分の賜物は正しく用いられているだろうか。隠している賜物はないだろうか。それらが主によって用いられますように。入会する兄弟の賜物も豊かに生かされていきますように。